

フィリッピーナを愛した男たち

久田 恵【著】文芸春秋（1989/10/30 出版）

294p / 19cm / B6判 ISBN：9784163437903 NDC分類：916

価格：¥1,528（税込）

プロローグ ニッポンの男、頭おかしいか

マニラ湾に沿うロハス大通り、ハリソン通り、ロザリオ、タガログ語、ジャパ行きガール、日本帰りのフィリッピーナ、マニラの街。

日本に出稼ぎに行くフィリッピーナが確実に年間一万人を越えたのが1979年。出入国管理局の職員たちの間でジャパ行き元年と呼ばれているその年。

日本の法務省入国管理局の統計によれば、1988年に日本に入国した出稼ぎ目的と思われるフィリッピーナは推計六万人ほどである。観光・修学・親戚訪問といった名目で入国し、在留期間が切れた後も不法滞在者としてバーやキャバレーなどで働くフィリッピーナを含めれば、正確な数は掴めないものの、日本全国に散らばる彼女たちの数は十万人を優に超えているといわれる。

身体にぴったりとした白いジャージのサンドレス。

一年二ヶ月の日本の出稼ぎから帰って来たばかりのこの二十三歳のフィリッピーナ、アグネスは、今、幸福の絶頂にあった。二週間前、戸籍謄本、住民票、納税証明書などの書類一式を携えてマニラまで彼女を追いかけてきたヤスオと結婚したばかり。彼は、大手都市銀行の大手町支店に勤めるサラリーマンで東京のれっきとしたユニバーシティを卒業している三十二歳の独身男性である。一週間ほどの有給休暇の間にあちこちにチップをはずんで書類を整え、シティーホール（市役所）に結婚届を出し、慌ただしく日本に帰って行った。まだ日本での入籍手続きは済ませていないが、彼と正式にフィリッピンサイドの結婚をしたことで、アグネスのお腹の子どもの父親も無事確定した。

ヤスオと結婚して、配偶者として日本に在留する資格が手に入れば、東京都マニラの間を自由に行ったり来たりしながら働くことができる。

アグネスは、アパートの一階部分を美容院に、二階をカラオケスナックに改装し、自分の親族の中から信頼できる責任者を選び出して店をまかせ、二ヶ月に一度は経営者としてマニラに戻って来るつもりなのだ。そこまで条件を作っておけば、ヤスオとの間に将来何かあっても、食べて

いける。智恵のあるフィリッピナは、みなそう考えるのである。

「ねえ、ジャパン行って三日目よ、ヤスオ言ったよ、アグネスと結婚したいだって。ナニ、ソレ、冗談でしょう。ワタシ、あなた知らないよう。なんで結婚考える。ワタシ、びっくりよ、ワタシのナニ好き、ヤスオ、いちばんね、足だって。オウ、レッグズ。セクシーだって。あなたナニ考える。ワタシの足と結婚するか、ワタシ、笑ったよ、でも、ヤスオ本気よ、真剣ね、結婚してアパートで一緒暮らしましょう、仕事やめなさいだって、ワタシ、プロダクションの契約あるでしょう。キャンセル五十万よ。ヤスオ払うだって、ナニ言うか、もったいない、ワタシ店やめない、働くよ。ヤスオのアパート行くよ、だから五十万下さい、それ約束、言ったね、ヤスオOKだって、ナニ考えるか。びっくりよ、ニッポンの男、みな頭おかしいかっ」

アグネスが十五日間の観光目的のビザ（入国査証）で日本に入国したのは、1987年の八月である。日本入国後は、プロダクションの用意した安アパートに入り、給料わずか月五万円の約束で東京江東区の小さなスナックで働き始めた。

プロダクションとの契約は一年。十五日間の日本での在留資格期間が切れた後は不法滞在者として潜り、一年後にイミグレ（入国管理局）に自首する。そして、不法滞在及び資格外活動による強制送還処分を受けてフィリッピンに帰国する、という筋書きになっていた。

アグネスは、十五歳の時から二十歳と偽ってマニラ市内のクラブでホステスをしていた。十八歳で妻子のある六十歳の金持ちのフィリッピン人の愛人になり二人の子どもを産んだ。彼の援助で、自分の家族のためにマニラに家まで建てている。ところがあっちの男、こっちの男と飛び歩くパロパロ（浮気者）の彼女に手を焼き、日本に来るほんの数ヶ月前に、もうギブアップだ、誰とでも勝手に結婚しろと放り出され、三歳と生後間もない子どもはそのパトロンに引き取られてしまっている。

マニラの新聞には、日本への出稼ぎ女性が急増し始めた1980年頃から、すでに日本でヤクザに虐待を受けたり、売春を強要されたあげくに一銭の給料も支払われずに放り出されたフィリッピナたちの事件が、日本で考えられている以上に微に入り細に入り報道され、若い女の子たちへの警告が連日のごとく発せられていた。けれど、現実には、アグネスの身の回りには、日本で大金を掴み、頭のとっぺんから足の先まで美しく飾り立てて帰ってくるフィリッピナたちの方がはるかに多かった。

カソリックの国フィリッピンでは妊娠したら産むのが当然だ。未婚であれなんであれ、できたものは産む。アグネスもごく自然にそう思うフィリッピーナの一人だった。

プロダクションとの契約期間も過ぎ、いよいよフィリッピンに帰ることになった時、アグネスは、ヤスオの付き添いを断って、一人で東京大手町にあるイミグレ（入国管理局）へ、不法滞在者として出頭した。

台詞は、一年二ヶ月前、日本に入国する時すでにプロダクションとの間で取り決めてあった。働いていた場所を聞かれたら「静岡」、店の名前はとにかく「わからない」で押し通す。下手に言うと、店を捜されて嘘がばれてしまう恐れもあるからだ。後は、「ヤクザ、給料ない、ワタシ、怖いです、ひどいです、ワタシ、もう、フィリッピン帰りたい」を片言の日本語で繰り返す。英語も日本語もろくにわからない馬鹿の振りをする。ともあれ、入国管理局へ出頭して来る外国人の不法滞在者は後を絶たず、対応する係官の人数も少なく、身柄を拘束しておく施設も充分にない状態にある。アグネスは、その筋書き通りにやって二日後の飛行機のチケットを見せただけで、勝手に帰りなさいとばかりに、あっけなく無罪放免となった。

フィリッピンでは大学卒の男の給料が月、一万五千円から二万円の間。五万円は大卒のフィリッピンの男のほぼ三ヶ月分の給料にも匹敵する大金だ。

第1章 神様からのギフト

アコ（私）、ユウスケ、エミリア。

保育関係者から、最近東南アジア系の外国人を母親に持つ子どもを預かるケースが目立ち始め、食習慣の違いから離乳食などに工夫が必要になったという話を耳にした。

1987年段階で、豊島区の認可保育園に入園している子どもたちのうち外国人を親に持つ子どもはすでに百名を超えていた。定員八名の零歳児中四人までが外国員の母親の子どもたという園もあった。

性を買うもの、売るもの、客とホステス、加害者と被害者、こういった構図のみで常に語られ続けてきた出稼ぎ女性と日本人男性との関係のありようも、彼らの恋愛や結婚という個別なケースを丹念に辿ってみれば、そこから、またひとつ別の新しい両者の関係のありようが見えてくるのではないか。

法務省入国管理局の出入国統計によると、1987年に日本に入国した二十歳から二十四歳までの国籍別女性の数は、フィリッピンが約三万人、台湾二万人、韓国一万人、タイ二千五百人となっており、フィリッピン女性が群を抜いている。

自分たちをジャパンに連れて来たダディ（とうちゃん）に聞いて欲しい、と言ってジャパゆきビジネスを手がけるある日本人プロモーターを紹介。

フィリッピンパブ「ワイルドダック」。そっとドアを開けて店の中に入り込んだ。そのとたん耳をつんざくようなけたたましい音の中に放り出された。見ると、薄いブルーの照明の当たったカラオケステージで、真っ赤なミニスカートや黄や紫の色とりどりの安っぽいドレスを着た女のこたちが取り囲み、曲の合間に「イエーッ」と嬌声をあげながら、エネルギーにステップを踏んでいる。

「アコねえ、お腹ん中ね、ベイビーいるよう、今、スリーマンズ、うーん、ハッピーねえ」

「ネ、アンナ、アコのベイビー、コスモポリタンよね。スパニッシュ、ジャパニーズ、ピリピン（フィリッピン）、いろいろよねえ」

「アンナ、ピリピンにベイビーいるよ。だんなさんとセパレートだって。だから、アンナ、ニッポンの男と結婚したいね。でも、あの彼、奥さんいるでしょう、むずかしいよ、心痛いね」

三日前に「ワイルドダック」に行った時のオレンジジュース一杯七千円也の領収書が頭にちらついた。

「彼女がもしかしたら、とか言った時は、僕、そんなに驚かなかったですよ。イヤ、本当ですよ。最初っから神様が許さないとか言って、彼女、避妊すんの嫌がりましたからね。してないんすよ、ちゃんと。そうなんすよ。あの子、クリスチャンなんです。だから、あれですよ。子ども堕ろしたりなんかも駄目なんですよ。それに喜んでましたから。ベイビー、ベイビーって。欲しがってましたから。あっちの子って若いのに子ども好きなんすよね。」

クリスチャンのフィリッピナは皆、赤ん坊は神様からのギフトだと考えている。フィリッピンの母親たちは、神への感謝をこめて、赤ん坊を「オウ、ジーザス」と言って頬ずりし、また「オウ、ジーザス」と言って接吻をする。彼女たちは貧しくとも皆そうやって育てられてきている。余程の事情がない限り、妊娠したら産む、というのはごく自然なことな

のだ。

そのため、日本で妊娠したジャパゆきさんたちの十人中、八人までが、周囲の日本人の中絶の勧めをかたくなに拒否して子どもを産んでしまう。「生命」にかかわる「中絶」は、彼女たちにとって「売春」よりはるかに重い罪なのだ。

二、三日悶々とした後、このまま彼女とつき合っていたら自滅するだけだ、と思った。潔くケリをつける覚悟を決め、喫茶店に彼女を呼び出し、交換していた写真を黙って突き返した。それが、男と女が別れる時のフィリッピンスタイルだと言われていたからだ。

「ワタシ、あなたと結婚するよ、結婚すればあなただけでしょう、フィリッピーナ、結婚したらパロパロ（浮気）しないよう」
コリポ（ケチ）。

エミリアは日本語学校へ通う就学生というきちんとした名目で日本に入国しており、プロモーターの指示によって毎日、午後一時から午後五時まで、池袋の日本語学校に通っていた。授業に出ていさえすれば、半年ごと二年間にわたって日本での在留資格が更新できるという特権を持っていたのである。さらに、届けを出せば、就学生には、一応、週二十時間までの労働が認められていることもあって、店にとっては摘発される危険の少ない安全なホステスという立場にあった。そのため、寮と食事付きで月七万円の給料の観光用ビザの女の子より、学校の授業料等を差し引いても月三万円ほど高い給料が店から支払われてもいた。

エミリアは、この就学生用のビザで入国する一年ほど前の 1986 年、フィリッピン政府の発行するブルーカード（労働許可証）を取得し、興業目的のビザで日本に働きに来た経験があった。その時は、長野県の観光ホテルでショーダンサーとして働いていた。当時、この興行用ビザでの在留資格は六ヶ月間で、いったんフィリッピンに戻って、半年たたなければ日本への再入国はできなかった（1989 年から出稼ぎ規制のために設けられていたこのインターバル期間は廃止になった）。そのインターバルの間、エミリアはマカティの高級クラブのホステスをしていた。マカティはメトロマニラ（ケソン、パサイ、カローカン、マニラの四市および近郊を含めたマニラ首都圏）の商業地区で、東京でいえば銀座に当たる地域である。その時期に、日本から来たフリーのプロモーターにスカウトされ、1987 年十月に再度の日本入国を果たしたのである。

在留資格は、出入国管理法に定められているもので、たとえば観光や親

族訪問を理由に入国した者には、出入国管理法第二節第四条第一項第四号に該当するため「在留資格4-1-4による入国」と呼ばれ、日本への上陸の際に「4-1-4」の番号のスタンプがパスポートに押され入国が許可される。

観光ビザ（在留資格4-1-4）で入国したフィリッピナーの滞在できる期間は九十日以内という規定はあるが、通常は十五日間のみで、むしろ日本で働くことは許可されていない。期限が切れた後も滞在していたり、働いていたりすれば、不法滞在や資格外活動（不法就労）に問われ摘発を受け、本国へ強制送還処分になる。ダンサーやシンガーとして働くことを目的とした興業ビザ（在留資格4-1-9）で入国した場合は、更新手続きをとれば継続して滞在できるが、ホステスなどの接客は認められておらず、これもまた摘発の対象になる。さらに日本語学校や各種学校に通うことを目的とした就学生ビザ（在留資格4-1-16-3）は、二年間継続して滞在ができ、届出を入管に出せば、週二十時間以内であれば働くこともできる。

金のために本格的な売春業（モンキービジネス）へと転落していくケース。

「アコ、ホテルノウよ、デートだけよ」

顔いい、パロパロ（浮気者）、若い、金ない、ヤクザ怖い、奥さんいる、困る。これが、日本語学校の同級生や店の先輩フィリッピナーたちから伝えられているニッポンの男選びの智恵でもあったのである。

ここ数年間の相場では、店がホステスとしてフィリッピナー一人を雇うためにかかる費用は月二十五万から三十万円ほどである。そのうちの約五十パーセントがプロモーターに行き、寮費や食費などの経費を差し引いた残り十万円前後が彼女たちの給料に当てられる。

プロモーターが、フィリッピナー一人を日本に送りこむための飛行機代、フィリッピン政府に払う出国税、ビザを取るため等の経費が約三十万円。この経費を差し引くと平均六ヶ月間の契約で一人につき最低四十万から六十万円くらいの儲けになる。常時十五人のフィリッピナーを確保して手に入る金がざっと計算して年間千五百万円前後。とはいっても、フィリッピナーの日本への入国規制が年々強まる中で、あれやこれやと思わぬ経費もかかる。スタッフの給料や事務所の維持費もある。摘発を彼らは事故と呼ぶのだが、この事故が起こればかけた費用は一切戻らない。ジャパゆきビジネスが濡れ手に粟だった時代は1986年のフィリッピン

でのアキノ政権樹立以前の話で、それ以後は次第にこの商売は資金繰りに頭を悩ませる中小の人材派遣業みたいなものになったというのが彼らの言い分でもあった。

フィリピンでは、妊婦が食べたいと言ったものは、たとえ夜中でも夫が買いに走ってたべさせなければならない。そうしないと、子どもが流れてしまうといわれているのだ。

男と女の絆を深めるのは、幸福な思いや喜びよりも、互いの不幸や淋しさ、心もとなさなのかもしれない。

アコのタータイ（とうさん）。

午後七時三十分、定刻から一時間半遅れて成田を飛び立ったノースウエスト003便が、マニラ空港に到着した時は深夜の十二時三十分を回っていた。飛行時間はわずか五時間程。

タクシーで十分程のパサイ市内にあるホリディインホテルに向かう。このホテル、ニッポンの関西ヤクザの常宿。

シゲ（またね）。

日本で出会ったフィリッピナーは、誰もが故郷に家を建てるのが夢だと言っていた。小さな家で三十万円。中くらいで五十万円。土地付きで百二十万から百三十万円。三百万円も出せば私兵を雇って警備をするヴィレッジと呼ばれる高級住宅街にベッドルームがいくつもある家を買う。とはいいいながらも、小さな家の三十万円でもフィリピンの人の平均年収の二、三年分の金額だ。

ジプニー（小型の乗り合いバス）。

フィリピンでは、三万、五万と、その都度少しずつお金を渡して大工に頼み、二年も三年もかけて家を作る。

妻の仕送りで、彼はジプニーを二万ペソ、約十四万円で購入した。お蔭で現在月二千ペソ、約一万四千円程度の収入がある。この収入と出稼ぎに出ている妻とエミリアの送金で大勢の家族が豊に暮らしている。

しかし、フィリピンでは五十歳を過ぎた親を何時までも働かせておくことは、恥ずかしいことだとされている。

「この国じゃあ、べっぴんの女房や娘は家族にとっちゃあ金づるなんだ。男は役立たず、女は財産だ。女が身を売らなきゃ、男も子どもも食っていけない国って、いったい何なの」

ナショナル、ヤクルト、アジノモト・・・と日本の大企業の傍若無人な大看板。

第2章 帰ってこない妻と娘

ほんのりと芳香を漂わせるサンポギータの白い花飾り。
マルコスのイメルダみたいに貧乏人からのし上がって三千足の靴を買う。

サリサリストア（雑貨屋）。掴んだ金は離すな、貧乏人は野心を持って這い上がれ。

ミスター・ボギー（色男）。

43歳の日本人男性川村哲三と一年前に結婚した20歳のステラ。
小型オートバイの脇に客席用のサイドカーをくっつけたトライスクル。
フィリピンの民芸家具を日本に輸入する小さな会社を経営。

「僕は確かに彼女を買いましたよ。ほっぺたを札束でひっぱたくようにして自分の者にしました。彼女も僕の顔が札束に見えていました。二人の間にあったのは金ですよ。金です。始まりは確かに酷かった。」

「だけど結婚して子供が生まれ、僕らは家族を作ったんですよ。そこから何かが生まれてもいい。二人の間に何か別のもの、別の気持っていうか、感情っていうか、何かそういうものが生まれてもいいんじゃないですか。でもなかなかそれが生まれない。」

ステラが初めて1985年10月、17歳になったばかりのまだ初々しい頃だった。

マルコス政権最後のこの年は、まだ今程には日本への入国の規制も強くなかった。それでも摘発を受けて強制送還になれば、日本への再入国が出来なくなるということで、名前も年令もでたらめの偽造パスポートを使って手に入れた十五日間の観光ビザで日本に入国し、不法就労するフィリッピーナが後を絶たない状態だった。

成田に着き無事イミグレ（入国管理局）を通過すると、空港ロビーには、気よさそうな日本側のプロダクションの男がプラカードを持って迎えに出ていた。彼女たちはその場でパスポートと見せ金の五百ドルは取り上げられた。見せ金は、イミグレの係官に観光用の所持金があることを証明するためにプロダクションから渡されていた金である。そしてパスポートの方は別のフィリッピーナの帰国に使われたり、偽造用に転売されるのである。

二ヶ月後の、再三にわたって皆で催促していた給料が漸く出ると聞いてほっとしたところが、支払われたのが僅か二万円だった。かっとして抗

議すると、プロダクションの男は、パスポートの作成代、アパート代や食費、日本への渡航費などの経費を差し引くところなるんだ、と説明した。

「福井市のスナックで監禁され暴力を受けて売春を強要されていた不法滞在中のフィリッピン女性七人が警察に保護を求めて逃亡。スナック経営者と暴力団員が警察の摘発を受ける」というテレビのニュース。

仕事の種類には、ダンサー、ホステスのみ、サイドライン（売春）があった。

今度のプロダクションの事務所は、東京池袋のマンション内にあった。彼女は一日中部屋の中で待ち、電話で呼ばれるたびに客の待つホテルへ出向くのである。一回ホテルへ行って、客がプロダクションに払うのは三万円。ステラには十日毎の精算で金が支払われた。最初の二階は渡航経費が差し引かれたために五万円。その後は約束通り月平均三十万円程になった。二ヶ月目に二十八万円、四ヶ月目に三十万円、プロモーターに頼んでフィリッピンの母親と兄の許に届けて貰った。

フィリッピンでサイドラインをすれば、日本人相手のオーバーナイト（泊まり）で客の支払は、七千から八千円、本人の手にはいるのは一人に付き三千円程。

プロモーターは意外な程あっさりとして契約のキャンセル料百万円でステラを引き渡した。

一緒に出稼ぎに来ていたフィリッピーナから電話で、千葉県松戸市のシアターにショーダンサーのいい仕事があると聞かされ、行ってみると、其れは場末の汚らしいストリップ小屋だった。しかも友達は姿を消してしまった。ステラを三十万円で売り飛ばし金を持って逃げたのである。ストリップ小屋の本番生板ショーなるものは、客の入場料四千円、それで何でもできる。

フィリッピンにはコールボーイと呼ばれる売春夫やトムボーイと呼ばれるレズビアン（女たち）が大勢居る。出稼ぎで大金を持ち帰ったジャパゆきさんの中には、マニラに帰るなり一ヶ月も二ヶ月もホテルに泊まり、これらを相手に遊び狂うフィリッピーナがいる。彼女たちは百万、二百万の金をあつという間に使い果たし一文無しになってまた日本に出稼ぎにやってくる。

モンキーハウス（刑務所）、日本刀「ジャパンのビッグナイフ」。

第3章 追いかけたきた男たち

マニラの日本大使館前には、連日日本行きのビザを申請に来るフィリッピン人たちの長蛇の列が続き、周りには色とりどりの屋台が立ち並んでおり、トイレタイム五ペソ（約三十五円）、半日五十ペソの順番待ちのアルバイトも大勢出てまるでお祭り騒ぎのような賑わいだ。

日本大使館では1987年から、プロダクションが扱う出稼ぎ女性のビザ申請を全て郵送方式に切り替えたそう。まずパスポートなどの必要書類一式と返信用封筒を入れた袋を大使館に提出し、書類審査を受ける。その段階で本人や業者側と一切接触せずに不備なものは問答無用にはねてします。書類を日本に照会した上で合格したものに対してのみ、審査修了証が送付され、ビザの申請が出来る。而も書類が完備していても疑わしいものは、渡航する本人との面接インタビューを通告。大使館段階で、本人とパスポートの顔写真を徹底的にチェックする。そのため大使館には、連絡しても誰も受取に来ないパスポートが、月に約百通ずつ溜まっているといわれる。

更に審査修了者に対しては、受付制限が設けられた。かつては一日五百人にも及んだ申請者を百五十人で一方的に打ち切るようになった。

マニラ市内には、日本への出稼ぎ女性を扱うプロダクションが、正式に認可を受けているものだけで三百社程ある。その経営者の多くが日本人男性だが、フィリッピンで外国人が会社を設立するのは難しい。そのため彼らの殆どが元ジャパゆきさんの若いフィリッピン人と結婚し、妻名義でプロダクションを運営している。

マニラでジャパ行きビジネスに関わる日本人の男たちは、主に興業ビザを扱うリーガル（合法）、観光で日本国内に潜らせるイリーガル（非合法）を合わせて、三千人とも五千人ともいわれている。

認可プロダクションには、オフィス内にタレント養成のスタジオが併設されている場合が多く、日本行きを志願するフィリッピン人たちが、専門の教師について歌やダンスのレッスンに日夜励んでいる。

彼女たちは、此所で半年程のトレーニングを受けた後、フィリッピン政府の発行するブルーカードを取る。これは海外でタレントとして働くために必要な労働許可証で、フィリッピン公認芸能センター（PECC）主催のオーディションに合格したものに与えられている。1988年現在で、有効期間三年間のブルーカードがこの二年間の間に約十二万枚も発行さ

れている。倍率三十倍の難関と言われているが、現実には乱発と言った状態だ。

この正式な労働許可証発行システムの陰では、夥しく偽造カードも出回っており、マニラの地下組織を通じて、一通につき一万ペソから一万五千ペソ（約七万から十万五千円）で取引されている。何処のプロダクションの金庫の中にも、本物と偽物が入り交じったブルーカードが束になって保存されており、プロダクションがお互いに手持ちのカードをランプのように交換し合って、日本に送りこみたいフィリッピーナによく似た写真のカードを選び出して使うといったことも日常的に行われている。日本人と結婚をしたり、出稼ぎを止めたりして、ブルーカードが必要なくなったフィリッピーナたちは、皆プロダクションにこのカードをさっさと売り渡す。

1988年には、二十五歳以下のフィリッピン女性の日本への観光目的の出国は保護者同伴に限る、との通達まで出された。その時は、観光ビザを扱うプロダクションのスタッフは、日本に女の子を送りこむには、保護者の渡航費まで負担しなければならないのか、と頭を抱えていた。これは年令詐称などの抜け道で直ぐに切り抜けられてしまったが、現在、観光ビザでの日本入国で残されているのは、香港経由でフィリッピーナを送りこむ秘密ルートを利用するか、日本人と結婚した親戚縁者の観光訪問を名目としたルートしかないと言われている。

1986年頃から登場してきた新ルートに就学ビザの取得がある。これは1983年から84年にかけて、中曽根元首相が文化国家として日本二十万人の留学生を受け入れると豪語し、其れを受けて84年の秋に日本の法務省が留学手続きを簡素化し、各種学校や専門学校まで受け入れ枠を設けたことで開かれたルートである。

主に日本側のプロモーターたちがこの日本語学校に目を付けた。ところがこの就学ビザの取得には、十二年間の教育を受けたもの、という条件がある。小学校六年、ハイスクール四年のフィリッピンでは、最低二年間大学に在籍したものでなければ、このビザが取れない。そのため卒業証明書を偽造する、年令も名前も詐称する、日本に住民票のある保証人を用意する、といった手続き上の経費に加えて、渡航費やアパート代の他に学校の入学金や授業料も必要だ。日本での在留資格を更新するためには、学校の授業に出さなければならないが、この管理も難しい。日本語学校は東京に集中しているため、地方には送り込めない。こういった

事情から、就学ビザにはプロダクション側の旨味がないことが分かり、扱うプロモーターの層は結局広がらなかった。

1989年からは、興業ビザで入国する外国人を雇い入れることの出来る日本のバー、キャバレーなどの店の条件が一層厳しくなった。今まで月額三十五万円以上の飲食税を払ってれば、五人のタレントを雇うことが出来た店が、1989年四月から月額七十万円以上の飲食税の支払い実績がひとつようになる。そのため日本でのフィリッピナーの需要が激減するだろうと噂された。

最後の手段として、結婚ビザというのがあるらしいと囁かれ始めてきた。これは日本人の男性との結婚を目的として日本に入国する方法である。そのためには、相手の男性の戸籍謄本が必要だが、フィリッピンサイドで婚姻証明書を作成しても、正式な手続きを取らなければ、男の戸籍には結婚の事実が記入されない。此所に目を付けたプロモーターの中には、プロダクションの独身男性スタッフの戸籍謄本を利用したり、日本の独身男性から謄本を買い取るなどして、ビザを取り、女の子を日本に送りこむ者が現れた。日本に入国後は、日本語学校に入学させるなどして在留資格の変更をする、或いはそのまま不法滞在者として潜らせてしまう。

「だけどここまでやらなきゃならなくなったら」、もうジャパ行きビジネスの先はありません。だってそうでしょう。日本に行きたい子はプロダクションを見限って、日本人の男を捕まえて、本当に結婚しちゃえばいいわけです。結婚すれば摘発の心配なく稼げる。行ったり来たりも自由。子供が出来れば養育費も取れる。家族の仕送りも肩代わりしてくれる。日本には惚れた女のために死に物狂いで働く純情男が結構沢山居ますからねえ・・・」

1988年に入ってから突如フィリッピナーとの結婚のための書類申請や、妻の日本入国へのビザ申請が増え始めた。一日三十人、多い時で五十人の日本の男たちが、次々と窓口を訪れてくる。

フィリッピンの結婚の手続きはさほど難しくない。まず佐藤竜男は戸籍謄本を持ってマニラの日本大使館へ行き、謄本の内容を英文タイプで打って貰い、独身証明書を出して貰った。その書類とマリタの出生証明書と男女双方の保証人のサインを添えてフィリッピンのシティーホール（市役所）に届け出て、仮の結婚証明書を発行して貰った。これを裁判所に持って行き、裁判所は十日間に渡って公示。その間にこの結婚に異議を唱えた者が無いと言うことで二人には正式な結婚証明書が手渡された。

この間の手続きは二週間で済んだ。

「オウ、マガンダ！（きれいよ！）」

第4章 茨城によく似た風景

マラテ地区にあるセンチュリー・パーク・シェラトンホテルは、マニラ市の中心部を占める広大なリサール公園の南側の一角にそびえ立つ二十階建て三角タワー型の超高級ホテルである。大理石をふんだんに使った広々とした近代的デザインのロビーには、如何にも金持ちらしい身を飾った外国人旅行者が行き交っている。私の泊まっているヤクザとコールガールのひしめき合うこぢんまりとしたホリディインホテルとは比べものにならない品格がある。

ガパンのスペルの頭文字のGをJに変えると、ジャパンになる。だから「あの子はジャパンに行き損なってガパンに行ったよ」というのが、日本行きに熱くなっているフィリッピンナたちをからかう最近流行のジョークなのだ。

運転手のジンが、この国では一人に一本ずつココナツの木があれば誰も飢えることはない、けど何千本も一人で抱え込んでいる奴が居る、其れがこの国の不幸だと言った。ココナツのジュースを飲んだ後の果肉は、栄養価が高く柔らかい内にスプーンですくって食べる。実を取った後の皮は、干して燃料にする。ココナツの木はフィリッピンでは一年中実を結び続ける。

橋本は毎月マニラに五万円の食費を渡している。彼女はこの食費を俵約して、毎日、細かいものを買って貯めて一年間で押入の段ボールを何箱も一杯にする。バーゲン品のTシャツや装飾品、石鹸、洗濯ばさみ等の日用品から、インスタントラーメンや焼きそばなどの食品に到るまで・・・これはフィリッピンに帰る時のお土産なのだ。去年はこの品々が段ボールで七ケース、百キロ分もあり、飛行機のバゲージ料金が十四万円になった。

第5章 故郷を捨てた男

笠原とテッシーが経営するギンザミニカラオケは、マニラのエルミタ地区、マビニ通り沿いにあった。その附近は、日本人のツーリストゾーンと呼ばれる有名な繁華街で、夜が更けると共に通りはどこもかしこも日

本名のけばけばしいネオンサインに彩られる。一寸さびれた新宿歌舞伎町のような有様になる。

マニラ市内に日本人がオープンしたカラオケバーは約六十軒から七十軒ある。その内の三分の二は一二年の間に何らかのトラブルに巻き込まれてフィリピンジンオーナーの手に渡ってしまったと言われている。

テッシーの希望でミンドロ島のプエルトガレラに二人で四泊五日の新婚旅行にも出掛けた。「シティーホールで結婚ね、書類色々よ、作って貰ったでしょう。それ三千ペソかかったでしょう。レストランのパーティーね、食べ物二千ペソ。エンゲージリング、マサオとワタシ、二人分ね、仕方ないよ、ワタシ買ったよ、一つ六百ペソ、二つで千二百ペソでしょう。新婚旅行全部船で行く、高いようっ、二百ペソするよ。だから、ワタシたちマニラからバスね。これ片道、ワンウェイ十ペソ五十セントボ。船、スペシャルで二十五ペソね。ミンドロのカラバンからジープ、五ペソでしょう。それからホテル、一日五十ペソよ。フォーデイズで二百ペソ。それからね、色々ね。御飯食べて遊んでね、旅行二千ペソ使ったよ。」フィリピンは、マニラのあるルソン島を中心に七千の島から成る国である。そのルソン島の南部にあるミンドロ島は七番目に大きな島だが、フィリピンの中でも最も未開発の地域だ。山深い密林地帯には、未だに最終狩猟生活を送っている多数の部族が存在している。観光に汚染されていないこの島の自然は美しい。

ココナツの葉で屋根を葺き、竹を編んで作った高床式の小さなバンブーコテージ。

テッシーはルソン島北部の高原都市バギオのギンバという町で生まれた。バギオは日本で言えば軽井沢のような高級避暑地で、夏にはマニラの政府要人がこぞって引っ越してきて、臨時の小政府を形成する。街並みは美しくフィリピンの観光地として名高いが、一握りの大事主の下で小作として働くおおかたの庶民は貧しく、電気も水道もないのが当たり前の生活をしている。

「ニッポン金持ちよ。でもフィリピンと違う、お金あってもメイドもベビーシッターも雇わない。ニッポンで奥さん、それハウスマイド・アンド・ベビーシッターのことでしょ。御飯奥さん毎日作る。掃除する。汚い、それニッポンの男嫌いよ。子供の面倒見る。一人で奥さん全部やるよ。怠けてはいけないよ。それから、お金下さい、お金下さい、ワタシのファミリー貧乏よ、これ言ったら駄目でしょう。嫌われるでしょう。」

ジャパンで暮らす、それジャパニーズスタイルでやることよ。大変よ。フィリッピーナ、それなかなかわからない。」

第6章 浦安の小さなフィリッピン

トンドは人口二十五万人とも言われるフィリッピン最大のスラム街である。マニラ市北部、パッシング川河口に、ブスブスと年中白い煙を吐いているところからスモーキングマウンテンと呼ばれる巨大なゴミ集積場がある。トンドはそこからマニラ港に沿い北十五キロに渡って広がる地域で、人々が廃棄物を利用して不法に建てたバラックが延々と続いている。そこの人々は毎日、大都市マニラがどっと吐き出してくるゴミに頼って生きている。ゴミの中から集めた空き缶はスクラップ工場へ運ぶ。使い古したビニール袋は丁寧に集められ、マニラ湾の塩水で洗って干して、まとめて一キロ六ペソで売る。パッシング川河口付近は陽に干されたこのビニール袋で遠くからどこもかしこも真っ白に見える程だ。残飯は洗って干し、肉片などは干して砕き、豚や鶏の飼料として中国人の業者に売る。男も子供も、毎日砂糖に群がる蟻のように、一本六ペソの鉄製の鉤棒を手にゴミの山を漁って暮らしている。而もこの宝の山に、なんとセブ島などの貧しい地域から、食い詰めた男たちが、次々と出稼ぎにもやってくる。一生懸命ゴミを漁れば、一日三十ペソ、多くて五十ペソにはなる。その中からこつこつ貯めた金を田舎の家族へ送る。ブラックマーケットで円をペソに替えると、フィリッピンの百ペソ紙幣が一万円に付き、十六七枚返ってくる。五十万円で百ペソ紙幣が八百から八百五十枚、百万円で千六百枚から千七百枚にもなる。大手プロダクション主催のグランド・オーディションには、プロの歌手やダンサーがどっと押しかけてくる。大変な難関である。というのもこのオーディションに合格して、ダンサー、バンド、シンガーの六人一組で編成されるショーチームに加わることができれば、正式の仕事ビザと本物のパスポートで、合法的に日本に入国できる。これが最も安全な出稼ぎのルートだと言われていた。

エピローグ ジャパゆきさんの結婚元年

フィリッピンへの日本人男性の買春ツアーが目立ち始めたのは 1974 年前後のことである。此所に端を発したフィリッピーナとの出会いは、そ

の後 1980 年代に入り、日本とフィリッピン両国の間に「女の性」を商品として輸出してしまうという驚くべき闇のビジネスを成長させていった。そして両者の出会いの舞台を、マニラの繁華街から日本の繁華街へと移した。

フィリッピナーの日本への新規入国者は 1988 年現在で年間五万人から六万人。しかし、正規の統計にはあらわれていないものの、年々累積する不法滞在者を含めれば、日本全国に散らばるフィリッピナーの数は十万人とも十五万人とも言われるようになった。

法務省入国管理局の調査では、正式な配偶者などとして日本に在留するフィリッピン人（在留資格 4-1-16-1 を有する者）は、1986 年末までは 5290 人だった。

1987 年になると、在留資格 4-1-16-1 で新規に日本に入国した者が 915 人、日本入国後にこの在留資格に変更した者が 2323 人と急増した。そして 1988 年の在留外国人統計では、終にこの資格者が 11298 人にも達した。これは々資格を持つ中国（台湾、香港を含む）席 16812 人、韓国・朝鮮籍 12532 人を今しも追い抜くような勢いで、1987 年と 1988 年のこの二年間で約六千人、年間平均三千人の割合で増え続けていることになる。この統計には日本人と結婚した男性及び配偶者に同行した連れ子も含まれており、フィリッピン人の場合、この八割程度がフィリッピン女性と日本人男性の結婚件数と考えられる。また日本人の配偶者の場合、永住権を取る為には五年以上の結婚継続期間が必要と考えられている為、この数字はここ五年間分の結婚件数を推測するおおよその目安である。